

2024年11月

第170号

ぱれっと



(株)北日本ベストサポート
Tel. 018-883-1888

今年の「ノーベル平和賞」日本被団協が受賞

今年のノーベル平和賞に唯一の被爆国で粘り強く核の廃絶を訴えてきた日本原水爆被害者団体協議会が選ばれた。ノーベル平和賞は1974年に佐藤栄作元総理大臣が受賞して以来50年ぶりのことである。平和賞は国際紛争の解決や人道支援、軍縮、民主化で実績をあげた個人・団体に贈られるものである。

日本被団協は1956年8月に結成され、唯一の被爆国としての実体験をもとに二度と核兵器を使用することがないように多くの署名を集め国連をはじめとして68年間全世界に訴え続けてきた。その実績を評価されたものである。

来年は日本が被爆されてから80年目となる。被爆者も高齢となり運動の継続に若い世代の理解を得て継続していくことが課題となっている。

日本への原爆投下は1945年(昭和20年)8月6日に広島市に、8月9日に長崎市に投下された。当時の米国政府の公式理由として太平洋戦争を早期に終結させるためとしているが、当時の日本は太平洋など進出していた地域はことごとく戦いに敗れ沖縄での悲惨な戦争でも犠牲を拡大し戦争続行能力すら危ぶまれる状況にあった。

原爆投下はこのような状況のもとで行われ、広島にはウラン型原子爆弾、長崎にはプルトニウム型原子爆弾が投下された。本当に戦争を終結させるためだけの目的とした投下だったのか疑問とするところである。

この原爆による死亡者は広島で9万人から16万6千人、長崎で6万人から8万人と言われているが、原爆症などでその後の死亡者を加えると20万人以上の犠牲者を出し、そのほとんどが民間人であり、国際条約に反するものであったと言われている。

核兵器廃絶の訴えにも関わらず、スウェーデンの研究機関「ストックホルム国際平和研究所」の報告によれば今年1月時点で世界の核弾頭の推計総数は、12,121 発となっており、保有数の最も多いのがロシアで 5,580 発、米国で 5,044 発、中国が500発となっている。

ロシアは、昨年、核軍縮条約「新 START」履行について一方的に停止することを表明し、ウクライナとの戦争でも情勢によっては核の使用をほのめかし威嚇している。

国連事務総長は「冷戦以来、これほどまでに核兵器の脅威が影を落としているときはなかった。核の脅威は最高潮に達し、核兵器を使用する脅しさえ聞かれるようになった」と述べ強い危機感を示した。

核兵器使用は人類の破滅と直結し当然廃絶されるべきものであるが、ロシア・ウクライナ戦争、イスラエルとアラブの戦争も早く終結させて欲しい。



「選ばせる会社の条件」

元慶應義塾大学名誉教授 村田 昭治



経営力とはなんだろうか

経営者に改めて問うてみたい気がするのだが、「経営力」とは何かということである。わたしは経営力のまっさきにくるのは、人間崩壊しない企業をつくることだと思っている。車座トークの継続はその土壌をゆたかに育てる。

人間の考え方、歴史観、価値観がまともであって、クリエイティブなことを大切にしてい
く人間との関わりあいを大事にするところに経営力は生まれるだろう。

そこにはトップマネジメントに信頼感が培われ、おのずからコーポレートメッセージが社会に対して訴求、つまりアピールされることになる。

そのような人間が崩壊していない会社は、比較的経営崩壊がない。なぜかといえば社内ディスカッションがきちっと行われている。上司が部下を育てることの義務を確実に考えていると思うのだ。だから私は広告宣伝も広報も必要ではあるが、人材投資をすることが経営者・リーダーにとって一番大切だろうといたい。それができて、人が育ってはじめて広告やPRが生きるという感じがしてしようがない。

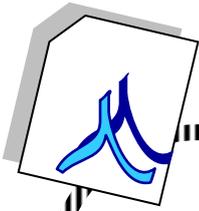
先ごろ女性の会に呼ばれて「育児とは何か」と質問された。わたしは「育児とは、教育の育に自分の自という字を書く」とお答えした。

自分を育てることだという感覚でなければ、いい先生にはなれないし、いい教育はできないと思うからだ。また教育というのは「共育」、つまり共に育てるのであって、家庭と学校と社会のみんなが育てあげることであり、それは「響育」といえると思っている。響きあって、ネットワークを組んで人を育てていくことこそ社会の教育ではないだろうか。

いい企業の経営者やリーダーは「育自」を怠らないし、社内の人財「共育」そして「響育」に力を注いでいるようだ。わが社はそれができているか。参考までに三つポイントを挙げておきたい。

1. 課題の優先順位をつけているか。課題の優先順位を、会議を開かなければ決められないということはないか。
2. 詰められないのは、社長自身の成長プログラム、教育プログラムが欠落しているのではないか。トップ自身が自分を育てる「育自」が足りないのではないか。したたかに学ぶ姿を社員が知ったら会社は強くまとまってしまうものである。
3. 社長、リーダーはDNAづくりをやっているか。創業の理念、哲学の炎を絶えずかきたてているか。その一層の強化を図っているか。

【「人を惹きつける経営」より】



萩原 朔太郎 (詩人・評論家、日本近代詩の父と称される)

- 1886年11月1日(明治19年) 群馬県前橋市で、開業医の父・密蔵と母・ケイの長男として誕生。
- 1893年(明治26年) 群馬県師範学校附属小学校入学。神経質で病弱。孤独を好み一人でハーモニカーや手風琴を楽しんだ。
- 1900年(明治33年) 旧制県立前橋中学校で、従兄弟の萩原栄次から短歌を教わる。
- 1903年(明治36年) 与謝野鉄幹主宰の「明星」に短歌三首掲載され、石川啄木らと「新詩社」の同人となる。
- 1913年(大正2年) 北原白秋の雑誌「朱鸞」に「みちゆき」ほか五篇の詩を発表。詩人として出発。室生犀星と知り合い生涯の友となる。
- 1915年(大正4年) 詩誌「卓上噴水」を創刊。「ゴンドラ洋楽会」を組織しマンドリンやギターを教授。
- 1917年2月(大正6年)32歳 処女詩集「月に吠える」を刊行。全国に名を知られるようになる。
- 1923年1月(大正12年) 「青猫」を刊行。「月に吠える」とともに朔太郎の代表作とされる。
- 1931年(昭和6年) 万葉集から新古今集にいたる和歌・437首を解説、「恋愛名歌集」刊行。
- 1934年(昭和9年) 明治大学文芸科講師。詩の講師、講義をする。
- 1940年(昭和15年) 「帰郷者」(第四回透谷文学賞受章)。
- 1942年5月11日(昭和17年) 急性肺炎のため死去。享年55歳。

オススメの *BOOK*



「老いに歎異抄」

作者 向谷 匡史 出版社 青志社

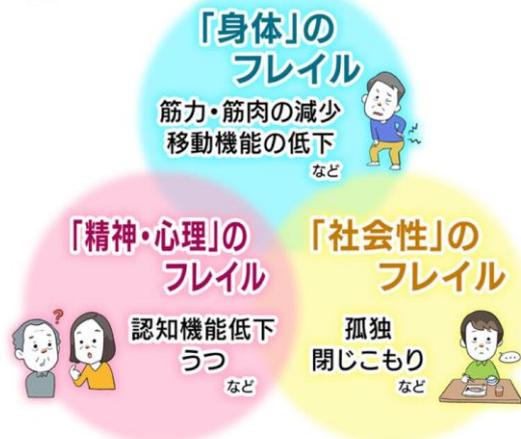
著者は1950年生まれ。週刊誌記者などを経て作家に、浄土真宗本願寺派僧侶。本書は親鸞の教えが歪められているとして、親鸞の高弟であった「唯円」が「異を嘆く」という意味で「歎異抄(たんにしょう)」を著した。これを現代風に分かりやすく解説し、晩年の「老いの壁」を乗り越える「生き方論」として語りかけてくれている。人生を照らす一冊だ。

あなたは大丈夫？『フレイル』

フレイルとは「弱さ」や「もろさ」を意味する「frailty」に由来しており、加齢によってストレスに対する抵抗力が落ち、回復しづらくなっている状態です。フレイルになると、転倒・骨折・認知症をはじめとする健康・生活機能障害に陥りやすく、入院、施設入所、要介護状態や死亡に至る危険性が高くなるといわれています。



フレイルの3大要素



フレイルは年齢を重ねると誰もが感じることで、日本は男女とも平均寿命が延伸して、世界トップクラスの長寿国です。これからは「元気に自立して日常生活を送ることができる健康寿命」を伸ばすことが大切です。

健康寿命に大切な3つの柱として、栄養(食・口腔機能)・運動・社会参加の3つがあげられます。お互いに影響し合っていますので、どれか1つだけをすればいいというものではありません。3つの柱をうまくリンクさせて自分の生活サイクルに組み入れていくことが大切です。

年齢とともに生じる心身の衰えを回避するためにも、たくさん食べて、たくさん出かけて、たくさん笑いましょう。

【編集後記】

今年の夏は全国的に異常な暑さに悩まされ、九州などでは異常な豪雨が続き被害が続出した。能登半島では1月に大地震に見舞われその復興が進まない中、今度は大雨の洪水被害。本当に気の毒としか言いようがない。

地球温暖化がこういう異常気象を起こしているとの指摘もあり、さらに、野菜や果物など農作物の作柄にも影響が出て物価高騰の一因となっている。一人ひとりが小さなことでも温暖化防止のため積極的に取り組んで行くよう心がけたい。